

## 勝股 行雄 (Yukio KATSUMATA)

学位：修士（文学）

略歴：京都大学大学院文学研究科修士課程修了

専門分野：英語教育

研究課題：1. 英語教授法研究

2. 英語教育の歴史的変遷

3. World Englishes の現状と今後

### 【論文】

- ・「国際交流への取り組み」（愛知文教大学紀要委員会編集・発行『愛知文教大学論叢』第20巻、2018年11月）
- ・「学校文法における『仮定法』指導の再検討」（愛知文教大学教職課程研究センター編集『愛知文教大学教育研究』第7号、2017年3月）
- ・「BE 動詞指導をめぐる諸問題」（愛知文教大学教職課程研究センター編集『愛知文教大学教育研究』第6号、2016年3月）
- ・「コミュニケーション型英語指導をめざして」（愛知文教大学教職課程研究センター編集『愛知文教大学教育研究』第5号、2015年3月）

### 【その他】

- ・English as Global Language and its History（出張授業、愛知県立岩倉総合高校、2022年5月25日）
- ・English as Global Language（出張授業、愛知県立南陽高校、2021年9月2日）
- ・World's Languages and World Englishes（出張授業、愛知県立日進西高校、2021年11月10日）
- ・愛知県立学校評議員（2016年～現在）
- ・愛知県商業高等学校スピーチコンテスト審査員（2016年～2022年）
- ・愛知県立学校初任者研修講師（2008年～2013年）
- ・愛知県高校英語研究会理事（2008年～2010年）

## 令和6（2024）年度ティーチングポートフォリオ

氏名	勝股行雄	職位／役職	特任教授
----	------	-------	------

### 1. 教育の理念

語学担当教員として、私は、言語を次のようにとらえている。言語はコミュニケーションの道具である。同時に思考、感情の基盤となるもの、そして文化、歴史、生活習慣を育むのも言語である。外国語としての英語を指導する際も、この見方を揺るがせにはしない。

また英語は現在、事実上の国際コミュニケーション言語の地位を獲得している。それは、英語がもはやイギリス、アメリカなどの国だけのものではなくなったことを意味する。この状況の中では、かつてよくあったような英語ネイティブスピーカーへの憧れで学習を進めるという態度はもはや通用しない。日本人は英語にどのように接し、どのような英語をいかに使ってゆくかという観点を常に持つべきと考えている。英語へのこうした姿勢を堅持して、学生の英語運用能力向上、異文化理解と自国文化再認識の促進を図るべく、日々の授業を行っている。

### 2. 教育活動の内容

Reading for TOEIC

Writing Intermediate

Japanese History C Age of Samurai

Japanese History D Japan's Modernization

アカデミアゼミ C

アカデミアゼミ D・卒業研究

愛知県立岩倉総合高等学校模擬授業「世界の言語と英語」

### 3. 教育の方法

毎回、パソコン、プロジェクターを使用し、視覚面、音声面でも学生を刺激する、わかりやすい授業を目指している。TOEIC 授業ではビジネスシーンでの生きた英語に触れさせる。問題演習を中心とするが、高等学校における学校文法とは違った切り口のコミュニケーションのための文法をプリント教材を用いて学習させている。Writing では、様々なトピックを与えて学生に英語を書かせ、課題として提出させる。添削をしたうえ、さら学生の書こうとした内容を、教師ならこう書くという模範例を各学生に添削済課題とともに返却している。

Japanese History の授業では、高等学校で培った日本史の知識を英語という視点から再構成してゆくことを狙っている。これによって自国文化のより深い理解と、英語で日本を発信する訓練になるようにと考えている。テキストブックは自作のものを使用し、またプロジェクターで様々な歴史資料を映し出し、さらに様々なトピックのムービークリップを示して、歴史事象の追体験の糧となるよう工夫している。中間課題、定期試験では日本史のトピックについて英語で自分の考えを書き表すことを課している。

### 4. 教育活動の成果・評価と改善方策

学生から、TOEIC 授業では中学高校で接した英語とのギャップに戸惑う声が出ている。これに対しては、実社会で飛び交っている英語に積極的に触れることの大切さを説いている。また現実の英語コミュ

ニケーションの具体的なあり方を TOEIC 問題を解く中から学生に示すよう心掛けている。

Writing では、英語を書くのは大変だが、添削や模範例を見て、少し頑張れば通じる英語になるのだと実感したという学生が多くいる。今後も丁寧な添削と模範例を示してゆきたいと考える。

Japanese History の授業では、ムービーの活用が講義の理解を助けてくれるという感想がよく聞かれる。ただし、授業内で用いる語彙が難しすぎるという指摘もある。歴史を語るためには historical terms の使用は避けられないが、中には非常にアカデミックなものもある。他の語への言い換え等を検討し、より理解しやすい授業にしてゆきたい。同時にテキストブックの改訂改善も行ってゆく。

## 5. 今後の目標

本学ディプロマポリシーにある「多文化共生社会」を実現するためには、異文化理解とともに自文化理解と発信が欠かせない。そしてその最大の拠り所となるのが言語であり、事実上のリンガフランカとなっている英語とどう向き合うかは、我々にとっての大きな課題である。常にこの問題意識を持って、日々の教育活動にあたりたい。具体的には、単なる解法テクニックの伝達ではなく、現実的な英語コミュニケーションの場としての TOEIC 授業、日本語単語の英単語置換作業ではなく心伝える英語を書くための Writing、自らの歴史を英語という切り口で新鮮に捉え直し、英語で表現できるための Japanese History の授業をこれからも展開してゆきたい。